



續拾遺和歌集  
上

特別  
8099  
12 (12)



84

8099

12

(1)

<2001-028>

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, spanning several lines across the left page. The text is mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side.



A small handwritten mark or signature, possibly a date or initials, located on the right page of the document.

續拾遺和歌集卷第一

春寄上

去より心なき久しゆ

前大御言為家

わがのまこと此をよとあふふかりきとたのむる  
千五百番子合

後京極権政前右大臣

とてたて給ふ歌乃志行れや屋裏ととも久きと  
久安六年崇徳院は小首首歌有り  
今御時春志  
くしめり

皇太后宮女史後成

昔より心なき久しゆ春日の山影のわさびは  
久きとたのむる



歌不叙

従二位家隆

天原の力てりゆる阿玉のうらむき  
建保四年後鳥羽院は百首寄子合  
よしゆり

参議雅経

あけのめしと心雷共ありて  
初春乃心を  
心三位家

み雪のちのまゝ歌立るゆり  
久保元多十首寄子合早春露と

万里小路右大臣

今と昔はありつづ  
題志次  
順徳院御製

少つと家柄乃建業のぬけはききしとよきはるのけり

後二位家隆

あつきし印の楮をゆして露りあつきの志く者

父と自首弁りあつて

無心

右上天皇

諱恒仁後醍醐天皇

かたあつきしききしとよきはるのけり

前内大臣 仰

庭乃面はとりとつて次つたてのさつきのあつき

残君れんを

前内大臣 一系

きつれとる風はゆり山けしとつてのさつきのあつき

建長六年三月廿一日

院中侍内侍

白雲いふ子そつとつてさつきのさつきのあつき

子あつて廿一日

原具親親臣

き風や梅のつゆいよつてかたあつきのあつき

陸子い山里の楮とつてさつきのあつき

空家

持大御之長家

ひらえとつてさつきのあつきのあつき

位とつてさつきのあつきのあつき

つゆり公をゆりつてさつきのあつき

右上天皇

折をたね色つらふ梅の花にたけあそむ春のあそび

不守心と 前大御言良教

そなたの地の梅の花をたけあそむ春のあそび

建保三年百三十四年とまわり守心

西園寺入道前大政大臣

春風や花さびし梅の花をたけあそむ春のあそび

新ら次 西行法師

今日さびし心より梅の花をたけあそむ春のあそび

子守番守心

前中御言定家

梅の花をたけあそむ春のあそび

あそびとまわり守心

後鳥羽院御製

鳥羽の袖をたけあそむ春のあそび

建保二年後醍醐院百三十四年とまわり守心

こころ守心

前田大信

あそびとまわり守心の花をたけあそむ春のあそび

新ら守 後人守心

今日さびし心より梅の花をたけあそむ春のあそび

新外書 土御門院御製

あそびとまわり守心の花をたけあそむ春のあそび

建保三年由裏の事と合はぬ事ありしを

前中納言定家

立寄りし事いふ程の事と申す所ありし事

洞院格政家百首寄に霞

西園寺入道前太政大臣

秋成り事といふ事とてある事ありし事

従二位行成

あつさり矢野の事いふ事とてある事あり

文永三年由裏詩事と合はぬ事ありし事

前大納言為氏

人ありし事といふ事とてある事ありし事

三乃其申

右近衛清基氏

雲井り候事といふ事とてある事ありし事

前大納言為家

と申す事いふ事とてある事ありし事

文永三年七月白河殿とてある事ありし事

ついでに申す事ありし事

山階入道大長

事といふ事いふ事とてある事ありし事

若菜百首寄とてある事ありし事

信正行意

事といふ事いふ事とてある事ありし事

思ふらるるにまゝりてしる人約たり

道因法師

たの浦は凡そなげとまきの日暮をぬたなはりのきり  
海を霞こころぬこころぬ

源俊賴朝臣

言敷たきの海へきの塩礫は浪の巻たす  
霞隔浦とつるころころ

藤原隆信朝臣

よこの浦の霧とあけつるしるきり  
野らるる  
たらの浦の霧とあけつるしるきり

中務卿宗尊親王

浦は凡そ誰のききり  
以長元年百首をよそまらり

常盤井入道宗隆朝臣

よこの浦の霧とあけつるしるきり  
建長二年のききり

院弁内侍

浦は凡そ誰のききり  
夫路柳舞とよそまらり

前用白友大臣 一条

浦は凡そ誰のききり



建保四年由裏百首并合

西園寺入道右大臣

青柳の糸をみどりいりしけしあをのよきに梅を深き

雨中柳をうつるるこころを

鎮倉右大臣

青柳のいとらつる念を夢を方老を去る毎を

新らるる

大原入道前右大臣

梅花をうらむとそひの影をり白の袖とこまりをす

建長六年三月并合之梅

後醍醐院御製

袖をいふをそへしは江のこの影をふしけし梅をえ

去はるる中

前大納言隆季

わさき梅のたらくええぬとそるは風をよき

家二十首歌よき梅をりに梅風をうつるるを

山階入道右大臣

梅をよはむとそるは風をよき梅をよき

建長六年三月并合之梅

前中納言資平

ひらりむらあつきのまゆをまらんとそる念をよき

新らるる

藤原門院少将

葉のよきあけし梅をよき梅をよき梅をよき

里にいてそる人のよき梅をよき梅をよき

初はつらふとて

月花門院

又書成るる人なりし程の如く公をよそとて  
巨梅とてふもなほ人なり

藤倉右大臣

程ふりしとていふひあつたの如くはむとて  
暁由厚とていふなり

藤原信実朝臣

わけたれはちも業とていふまゝとて  
光の若も入道前右政家の子合し  
洞院右政丸大臣

初とて勢あつたるもの如くはむとて

百首あたまなり

入道二所親王性助

そらけらるる勢とていふまゝとて  
入道親王性

まゆらつたまの事とていふまゝとて

君山花とていふなり

梅峯使云通

室かたのめとていふなり山嶽  
親の言中

室かたの袖とていふなり

藤原清衡朝臣

春泉を改て居山は花用をなすためを好む事  
ゆへに山はさうせり

院侍由侍

ちびりよわぬつこの山はくむり元とたはねり  
弘長元年百首歌ぞまろり守り時記

前大納言為家

あつ雲の多はひとらむさむさむとすり金巻山を  
新し守

順徳院御製

栲の山崎とみれいさむのむとのこしとてかたむき  
建保三年百首歌すまろり一ひき

系議雅理

だらるるゆふ山をかこむる山のむらりさうきと海をた

道助法親王の歌一卒首言ふたけりまふ山栲

西園寺入道おと政土居

さうゆふ山をさうとてねりまろりのまふりさうき

建保三年の首言合り春山胡

後之我を改て居

山はり雲は袖や白やをたさうりさうきとてさうき

前由之居基

雲をさうりまろり栲をさうりまふりさうきとてさうき

雅成親王

知るるをたさう山はくつさうきとてさうきとてさうき

光厳寺入道前信政天皇

さう新あつておぼしめはに日とけつるのたふれり

言山春望とよみ

中務卿宗尊親王

花乃書は世ごとくあつて白くして心はつとじまのたふ

山階入道左大臣家十首歌よりとりきたる歌

つらふ心をよみてつらふ

前田之臣

とらつて凡のほしてなる新の巻うこととあつて

文永甲午由裏約言合春日望山

お大由言良教

風うり本所た道と屋で私あそつて心志望の心

花酒之為家歌と百首よりとりきたる

藤原隆祐親王

言ぬとそよめとすてあつてむらりる心

花酒言通方新入頭と約書の時よりとりきたる

月乃と東大炊五の花入にとりきたる

りてはつとて

土御門院清教

花乃本所とあつて心はつとて

京極前関自家肥後

春乃新抄あつて月乃と

後鳥羽院御製

わが寝る人なき心そふ所の花よりかぬ花のうら

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

續拾遺和歌集卷第二

春弄下

新ら歌

後二位家隆

昔の山にさきまき柳のかげき山うらわを春の影

千五百番奇合耳

皇太后宮女文信成

去る形もふけせり柳葉の山うらわを春の影

守りては歌ま家り六十首奇一より人作り

やうり

うらわの影の山うらわを春の影

歌のやうり

菅原隆祐の也

山宮に於て其の祭をするるに雲のふりて其の祭をす神  
山階をさすは家の十首言ふ小妻彦彦

狩申油言云守

何れ神も流りふさりか携てぬる由そより其の物言  
文永二年七月白河殿ありて其の言をさしりて七百  
首つらまらり其の言をさしりて其の言をさしりて

藤原光俊朝臣

あまのこゝろを日敷のつらみありて其の言をさしりて  
部ら守

後醍醐院御製

之凡のゆき言ひとまらるゆき言ひとまらるゆき言ひとまらる  
平忠盛朝臣

いづれも言はれしをさしりて其の言をさしりて其の言をさしりて

平泰時朝臣

いづれも言はれしをさしりて其の言をさしりて其の言をさしりて

貞治元年十首言ふ京山花

皇太后后言云大後成女

言はれし言はれしをさしりて其の言をさしりて其の言をさしりて

弘長三年由裏言ふ百首言ふ之をさしりて其の言をさしりて

前大納言考氏

言はれし言はれしをさしりて其の言をさしりて其の言をさしりて

百首言ふたぐまらりて

権大納言澄任

ふんせむうそくのまゝあはれ地行ひあつたる  
目より金襴をりまゝあはれあはれあはれあはれあはれ

字名

前中油言資系子

今のまらこ首のやち極まきをかされてあつたる

前中油言定家のこまらひに言極工つけはつた

字名

光明寺道前極及たる

ふりくまへんをいふ金襴屋くまへんをいふ

見花日書といふるあつた

中務具平親王

まはらぬあまのこをいふるあつた

銀不念

後鳥羽院法製

ひんたあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あ田上居基

あまはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

院并由約

あまのあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

元約法師

あまのあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

平重時朝臣

あまのあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

道助法親王家の平首寄小山極

象後雅理

わたりてしむるはてはたつるをきくはるる風

藤原為世朝臣

鳥かみ形をぬれぬのちをよとてうらやまふはら

建保四年由裏百首并合

従二位家隆

ふりせしむるをいとも梅の花かきりゆきぬのちを

文永四年由裏詩歌合春日山

従二位行家

ふりせしむるをいとも梅の花かきりゆきぬのちを

建長六年三首并合梅

前中納言雅言

ひらきしむるをいとも梅の花かきりゆきぬのちを

正三位兼家

ふりせしむるをいとも梅の花かきりゆきぬのちを

善山親といふなりと

従二位成實

ひらきしむるをいとも梅の花かきりゆきぬのちを

兼家強雅

ふりせしむるをいとも梅の花かきりゆきぬのちを

建仁元年中首言たきまわりなり

前大信正慈光

ふりせしむるをいとも梅の花かきりゆきぬのちを



雲林院乃我と云て

荻原基俊

今おれと我やまらつら山樵又は何所ありとらりたりと

百首言中に

式子由親王

少風とのけさの父のまゝとあらんと我らと云

西園寺入道前太政大臣家の三千首并ふ

信實朝臣

雲りともよと成ゆ少く我らたゆのさく時

建長三年吹田に十首言たてまつりて

お大由云考家

たらしまらむたぬ乃山樵とらりて我のちり

言交中に

前中由云匡房

冬にわひのりや山樵ちりて我乃由云を

行始花とらりて

行中由言通俊

ちりゆ初由云と云書は初より道と云

山樵花

澄覚法親王

殊ゆと云く我らとらりて我らと云く

庭花初とらりて

右上天皇

海と云く我らとらりて我らと云く

東山寺より初とらりて

今之内大臣

源成 大内之五男

山内之ちび色子ありけり金人かき指しうらむる喜風

中務宗高親王家の百首言り

前代若侍傳教定

根よりむろねくみへ出ゆる節にれゆる違乃ら者

百首言りてまつり付

春宮大史実直

たのむじまよりぬの流りふ之聖乃部の新れ志者

長治二年百首歌をよめる考に落花

皇太后言大史傳成女

守心そと櫻帝とゆふの流りて庭と初とや分る

弘長二年内裏百首歌をまつりてこれ違上

落花

行中御言御平

そふのまきり地をさの西に流りじまてちる櫻ふ

堀川院以付鳥羽系中池上歌とる多きを梅

とれまのた

大御云俊明

ふりあつはちりふ歌をよめるゆの池上歌を流せれ

建保二年初言合り河上歌

順徳院以製

首狩川書けのね乃妻のふそりそを流す初の上風

妻乃言中記

從二位行家

三位家男

ふ野河院のふそり山内とる志ははの初とらじ

百首あたまてよひりつ時

侍従雅有

侍従雅有(藤原教隆)

いよりの数乃機やみまののそるれ割とちりほりし

建保四年内裏百首平合小

常盤井入道前太政大臣

初瀬川むの丸のの清そとまほつそめせの白波

後久我太政大臣

山ゆまきむせよふらふも風こまらぬ初乃ちる丸

新らぬ

後鳥羽院法皇

ちり初瀬川の志下やせり入らうとほつまれ山川

從二位行家

あひまの海はなれちりむをほそひつりる山川あひ

入道二所教王通明

うらむをりこまひの川のたのめをむしそむ

康徳門院女将

ちりちりふえの風つとさむらりわらむを確かた

院弁内侍

まほつ初のためる若よりそとちのまらぬまらふむせ

東社入道前関白定治おと雲隔残花の浮る

おと風もせゆさうらに

明後

たらから初をけり山裾凡ふのそま喜れなるを

花山院朝の後せしむる心はふらりて  
朝とつるをいふをいふはふらりて

前大御言云任

みふまにららるるをその心はふらりて  
百首言ふはせしむる中に

順徳院御製

雪とせしむる心はふらりて  
弘長三年内裏百首歌子とてしむる  
月を

前大御言云任

雪とせしむる心はふらりて  
文永二年七月白鳥五子とてしむる

て七首言ふはせしむる中に  
浦春月

後醍醐院御製

雨とせしむる心はふらりて  
浦春月とてしむる中に

前大御言云任

晴乃まの心はふらりて  
浦春月

題云次  
昔藤井入言云云

雨とせしむる心はふらりて  
二位家隆

題云次  
二位家隆

雪とせしむる心はふらりて  
光俊御言

光俊御言

とらひてあつらん水とせはけとまひのり子とせや  
道助は親王家の卒首言る中に川歌冬

正三位 赤家

この河はとせの神をて浪とひる言ふ此山歌  
あつらん水と

惟明親王

わけてあつらん水とせの神をて浪とひる言ふ此山歌  
あつらん水と

久人 一守

あつらん水との山歌とせの神をて浪とひる言ふ此山歌  
あつらん水と

徳倉右大臣

あつらん水との山歌とせの神をて浪とひる言ふ此山歌  
あつらん水と

前大納言 考家

あつらん水との山歌とせの神をて浪とひる言ふ此山歌  
あつらん水と

藤

あつらん水との山歌とせの神をて浪とひる言ふ此山歌  
あつらん水と

後醍醐院 御歌

あつらん水との山歌とせの神をて浪とひる言ふ此山歌  
あつらん水と

土御門 俊小宰相

あつらん水との山歌とせの神をて浪とひる言ふ此山歌  
あつらん水と

土御門 内大臣 藤原

前中納言 定家

吾等神祇の世々や故の風流にふりあがり  
交化二年百首歌たしまつり多ふ書ま

赤田之臣 基

里のうらやまの世を我にのりてはむかひ  
むかひ

赤中酒言定家

里のうらやまの世を我にのりてはむかひ

赤田之臣 基

里のうらやまの世を我にのりてはむかひ  
むかひ

續拾遺和歌集卷第三

夏弄

交化二年百首歌たしまつり多ふ書ま

後醍醐院御製

わらわのうらやまの世を我にのりてはむかひ

山階入道尤之臣

里のうらやまの世を我にのりてはむかひ

赤田之臣 基

赤中酒言定家

里のうらやまの世を我にのりてはむかひ

赤田之臣 基

時を以て念ふはよき事なりと云ふ事ありて物言ひ

後述大寺た上旨

我もまたいささか新すまらざるにけり

平政村胡旨

時を以て念ふはよき事なりと云ふ事ありて物言ひ

大田言信

時を以て念ふはよき事なりと云ふ事ありて物言ひ

源義氏新旨

中務卿宗尊親王

時を以て念ふはよき事なりと云ふ事ありて物言ひ

和泉式部

時を以て念ふはよき事なりと云ふ事ありて物言ひ

右近大将通基

時を以て念ふはよき事なりと云ふ事ありて物言ひ

右兵衛督基氏

時を以て念ふはよき事なりと云ふ事ありて物言ひ

右大臣少将兼右近衛少将兼右大臣

時を以て念ふはよき事なりと云ふ事ありて物言ひ

時を以て念ふはよき事なりと云ふ事ありて物言ひ

大田言信

時を以て念ふはよき事なりと云ふ事ありて物言ひ

和泉式部

まはる物あり久きまつる山はさき先うまひ

其二位家隆

あつたのきほとりのけりそくやうその玉河の里

光俊の旨

けりた程きけそく詠えあひのくさるるのきあは

信實の旨

一よのちりつるはけがた我もかひいとぬふふ

藤原隆博の旨

一そめあふぬあのかきまふりそくで程もは

遙岡時馬とつるふを

源道深

とあつた一よのけきまひ人のさるるをそあひ

醍醐入道前太政大臣

都えた一よのちりつるはけがた我もかひいとぬふふ

後鳥羽院法皇

けりそくをけりつるはけがた我もかひいとぬふふ

文治六年女御入内之屏風

後鳥羽院法皇

けりそくをけりつるはけがた我もかひいとぬふふ

後鳥羽院法皇

百首ありあひつるに付馬

後惠信卿



とらふ事人年とを御取らむきかろふ事とていふはあはれと  
夏衣申ふ 一年起法師

山と成くと程を付多き子とていふとてうへなる  
堤三位頼政

時多末とらふ事ありゆゑ不志乃孫あり書ありと物を  
翌日の此とらふかたは律の國をまゐるとよむゆかり

三月よりあふるの浦の孰とて此字を縄なりとゆふけ  
菅浦とていふゆかりあり

あやめ一巻とらふ此巻ふじの巻とてあまのみと  
前中御言雅具

百首あめめり一冊くに  
太上天皇

あめめりあふる三月と刻めてするはたは此録をかくる

寛保三年後鳥羽院百首歌子てまゐりありあり  
前大御之隆房

あふるそ人秋とてあふるあふるあふるあふるあふるあふる  
建保三年あふるあふるあふるあふるあふるあふる

あふるあふるあふるあふるあふるあふるあふるあふる  
あふるあふるあふるあふるあふるあふるあふるあふる

百首歌子てまゐりありあり  
前内大臣

予ら此の巻をむねびりしとて袖の巻たるを此の巻

貞治元年十首言合の五月部々

右近大將通忠

たらねの白き月の時多つふふとあつじうとる

部守

必形法師

書く此の巻は朝の西東にわきとるぬれかたに

お実白丸大臣 一系

わきとるぬれかたにわきとるぬれかたに

権僧正實伴

又口せのこどもに初の日もは成人の書るまふれのは

百首言合の五月部々

春言大実實兼

晴屋の目数とるく山分をいふかたのりや月毎に

弘長元年の百首言合の五月部々

衣笠由上

ぬれかたにわきとるぬれかたにわきとるぬれかたに

洞院極政家の百首言合の五月部々

赤大袖言為家

えり極のまふれひつじとるる浦のふまをわきとるぬれかたに

部守

藤原忠資朝臣

右の巻も思はれなくも西七巻のりや乃とるぬれかたに

百首言合の五月部々

侍從雅有

有良少川の工水のそ浪乃のそそろ二とら乃松  
前右近中将資盛家奇丁合とありぬ

白土の后文と文後成

と文の雲乃とるを河原乃つふ小夜と志のに記  
特河といよませ給ふ事

後漢誠院清製

夕臨ふかぬと成たなりつみ手さのひつうひみぬ  
団の月乃ついつらうとよんぬ事

行大御言云實

おとろの若とそまひ討ちたつと月と月かたぬ

百首あめさけつみくに

本上天皇

東屋のまねおとのみり朝とあまの月乃月  
按察使言定

源とわぬとつる石乃ひあふ朝乃の夏屋乃月

依月交涼とつらふ事

源理と夏屋乃

乃の夏屋乃とら乃の月乃とら風やとら  
大御言通方人々すとら八播宮とら合

ゆり守乃と夏屋乃

源有長朝臣

夏あつといふの時の海こころ新て夜もなを誓城新  
夏治百首あつたてまつり書り夏月

藤原門院但馬

夏あつといふの時の海こころ新て夜もなを誓城新  
夏治百首あつたてまつり書り夏月

法下寛寛

夏あつといふの時の海こころ新て夜もなを誓城新  
夏治百首あつたてまつり書り夏月

入道二所執事道助

夏あつといふの時の海こころ新て夜もなを誓城新  
夏治百首あつたてまつり書り夏月

前大納言資季

夏あつといふの時の海こころ新て夜もなを誓城新  
夏治百首あつたてまつり書り夏月

兼光元年由喜平合水色夏月

信実新信

夏あつといふの時の海こころ新て夜もなを誓城新  
夏治百首あつたてまつり書り夏月

致不致

土御門院法製

夏あつといふの時の海こころ新て夜もなを誓城新  
夏治百首あつたてまつり書り夏月

中務卿宗子親王

夏あつといふの時の海こころ新て夜もなを誓城新  
夏治百首あつたてまつり書り夏月

浦葉といふころころ

必新法御

ふりて事なるや班波のむくひふあはれくと書置  
新くらる

心三位初家  
わ城守のりあふたふりあのをれをる世にけりれ  
堂大龍丸秋己近とらるるころを

大寺門院以製  
と藤原志のふきれと書置つ伊く帯の秋まひん

夏活百首あやりのきり付白雨  
前田大信 書

わらひのたふきり付音のころむらひにかるむき  
むきりんを 寐蓮法師

吾月のそくれとてとまれりそこの嶺乃又たはれ  
前田白丸大信 系

かきふの程と方けしむり書置まにそりけり  
後多羽院法製

ふたらの時あくまの本あらり入早くとて書置  
百首あやをまらり付

式乾門院法連  
ゆきらのちあ乃あそ書置まらりしとたはり此あなるま

夏秋の中に  
前右書法書教

あやとてあらわらひにけりそをりすくはるる  
系議雅理

あまきと白紙とそりけり書置まらりしとたはり  
あまきと白紙とそりけり書置まらりしとたはり

弘長三年由裏百首言たてしはりし村杜蟬

前大納言為氏

半りて書ふ時々の蟬のたれ者より子なきは杜

建仁元年中首言たてしはりし村

前大納言為氏

冬れに野中の松の下にけし松をゆきかきしは

納原乃公也

順徳院御製

夏ゆきと松井の水乃出松あり風ありあけぬれ

建保四年由裏百首言令

村中納言定家

夏まじりみそはちのこは風定はたなきかほきあり

四年百首言たてしはりし村

西園寺入道おと政公

口授すりぬきしそりあはきあり月の原上を東

松風を吹

續拾遺和歌集卷第四

秋寄上

へくし百首方めさねは并てふ

大上天皇

ふゆがらむは凡の書物とていふも力あそむか

初秋のふゆ

まの春も入道前移改たを言

うまはふふふ葉乃玉此敷そひく露吹ひと秋のそ風

養治百首寄たてふしりきる耐早秋

大宰持帥為經

柳のふ初いふはとそらん衣かそひはちくはひまはり

道助は親王家のや青言とれるしと

從三位行純

風のそとそはらるは秋ひきてまはらあそむ志原

秋のそと

後鳥羽院清和

はつと舞のそそ葉と書ゆ事そ袖とまゆはゆはる風

まの春も入道前移改たを言

院女侍由侍

あふ葉書あそむるはの園るる吹うひは秋の初を

初秋のふゆ

後醍醐院清和

ゆそとふふとひするは秋の志井乃水と花と事分り

養治元年十首方合し初秋風

右近大将通忠

是乃方々... 弘長元年百首歌をまらり多府早秋

前内大臣基

歌上... 秋奇の申に

秋奇の申に

あふ信正隆年

... 弘長三年由裏百首言をてしはりり付方々を

弘長三年由裏百首言をてしはりり付方々を

權中御言御平

方々の雲... 七月七日... 七月七日... 七月七日...

七月七日... 七月七日... 七月七日...

此のふ

堀河院中宮上総

ちきり... 権大御言実家

権大御言実家

後... 修理大史隆康

修理大史隆康

... 百首歌... 後鳥羽院御製

百首歌... 後鳥羽院御製

後鳥羽院御製

... 待賢門院堀河

待賢門院堀河

... かき... 待賢門院堀河



方後納礼を

法橋顯昭

そらかたけとの原と方たの原此玉乃かきやる人  
入道二宗親より家へ奉首言ふ力仍るに神守

津守國助

海り家とは露と秋のたにふもかつらう秋風を  
弘長元年百首歌をよこしけり守り付秋

寺務井入道前太政官

秋の葉に風まの吹れ又もれと書き建てること  
多の原の付乃ち我合に

修理大友政季

秋の葉に風まの吹れ又もれと書き建てること

新ら次

順徳院法皇

かみの心秋の葉のまの吹るより十とて秋風は吹  
若く百首ありて守りしむくふ

よもあつてもなすれや志りて人將酒のよめ秋の  
建保三年百首言合し行路秋

皇太后宮土御宿成女

ひのこやあひらの秋風露かけりて秋の葉を

秋言り中に

前用白太土官

藤島司

久もれりも秋の葉の吹りて秋の葉を

澄寛法親王

心うそりて物なほふもわつとあひさ秋の葉を

述懐百首の中に

皇太后文太后文後成

少らざる御たらむありとてさげも物も我うう形と

新らる

長寛法師

手紙すれ程と白くおぼしきそえおぼしき程と

くえくくく

所へいふとてそを昔も秋をさけまひひひ

行路薄とつるを

藤原隆祐朝臣

袖うららとていふそとのふたを風物せう

建保三年百番司合

順徳院法皇

ゆき霧のまはれ秋をさすはらとてそを袖とて

秋をさす

法二位家隆

わさよのすそ程の程とてそを昔ゆ凡とて

建長三年八月十日

前由大臣

新うむたふありてそを秋とてそを秋とて

新うむたふ

権中細言云守

さうたふをさす秋とてそを秋とて

秋とて

大沙門院法皇

秋とてそをさす秋とてそを秋とて

野花物語とて事なり

藤原範永御旨

公ありて我れやとらむ物下りて白ひそしめおのれを

并よとまませ給まら

右上天皇

系本昭の本下家とらみてしゆりそしめおのれを

野麻とらるるを 從三位忠直

文政野のそしめたるを并れかたりやうらふ多し麻をそしめ

入道二京親王家の中首親よをゆりまら付

春宮大史實兼

久かたる小新つとはまらりてあまの物風とらむる也

風市麻とらるる 津守御國

か息のすそ指の言に麻をそしめ新あはれく粘をそしめ

粘より申に 蓮生法師

わとそ指のそしめたるをわらふ多し指らぬ麻をそしめ

甚後

書らる麻の波やわと粘とこひくそしめをける白鳥

院女侍内侍

そふく粘のそしめたる麻を粘あつて力中はとらぬ

從三位光成

粘のそしめたる麻のそしめたる麻のそしめたる麻のそしめたる

建保元年百首あやけりつみくた

後鳥羽院御製

露下をに形への子粒のめあふをきかむての御製  
部ら次

皇太后言大女後成女

秋凡の山の床の勢をくく露の鳴もくもを秋の夜  
建長三年九月十三日奉十首言合言言山床

入道右大臣 定雅之

物とぬふ心たのて勢をくく床をゆくの物や秋の  
夜床といふ事とよあり

祝部成良 長一

言秋の初るなりし物とぬふ心たのて月深なる夜なる  
建長二年九月詩言とありてやと申すもくもく山申

秋真

入道内大臣

深妻之御入道方男

わすれの山風をひきき月影とさ暮あけぬや床のすかん  
秋の初るなり

後鳥羽院御製

夕かろくえを秋の初るなり床のすかん  
兼暦二年内裏言合言床

行大御言云真

旁よりく心たのて入の床の勢をくくもや成と云  
初るなり

前原為頼初言

秋霧の空をひきき月影とさ暮あけぬや床のすかん  
建長元年百首言たてしれり時初るなり

前大御言為氏

今りのまゝもかゝりて昔のまゝも新しきまゝも

抄あり申ふ

寛仁法親王

海より雲井の宿も静くとも風さびしく成りしは

善文園廬といふらんを

太上天皇

を所ら静けりてくまぬまははるかに宿りてく

新らる

康徳門院十将

くまねの音もひびくも宿りてくわき風さびしく成りしは

信實朝臣

宿りてくまねならぬもはるかに宿りてく

百首奇をていふらんを

行信正實伴

ひびくも静けりてくまぬまははるかに宿りてく

新らる

普光園入道前室自たを

えりてくまねならぬもはるかに宿りてく

坂河右大臣

まゝのまゝもかゝりて昔のまゝも新しきまゝも

百首奇をていふらんを

藤原為世朝臣

まゝのまゝもかゝりて昔のまゝも新しきまゝも

秋亭中に

常陸井入道前太政大臣

くまねのまゝもかゝりて昔のまゝも新しきまゝも

弘長元年百首言たてしはりのむる付務

前大御言考家

初めけりこの心算をわくありきとて秋乃月

新ら次

中務卿宗尊親王

舟中よりこの秋をてて又言うはるはる河

百首言中に

前中御言定家

わろくとりはるこの言をそり屋の室に秋をわく

文永三年八月廿夜言合小末出月

式部院院法連

初めはるこの言をわくそり屋の室に秋をわく

秋乃月中に

正三位初家

かうたの袖の秋風を新言をそり屋の室に秋乃月

建長三年八月十五夜言合京月前風

院少将由侍

山乃山をわくはる月をわくはるはるはるはる

新ら次

後鳥羽院法連

わろくとりはるこの言をわくはるはるはるはる

中御言教良

はるはるはるはるはるはるはるはるはるはる

九月十三夜五首言合小末月

春宮大史更直

わろくとりはるこの言をわくはるはるはるはる

歌不念

平時村

ひまのうらとみわらふ山をばとめふとすまの月  
秋の比は情もあつくよる人のまを

前中納言資実

予の目も秋の空はとも雲をなすはつ山をの月  
秋依月勝とつるまこころ

後醍醐院御製

ひまのこの空はくは秋をとも平乃の月其影はさゆ  
建長三年九月十と夜十首を合と右の月

冷泉右大臣三和

年をくひり月をわかにわらふ山をみよは秋の月

月言中に

中務卿宗尊歌

「我まそいそふいとふむわらふ月かたぬ影のさき  
文永二年八月十と夜を合ふ停午月

後二位行家

今も我の夜井乃水の影をともこの空今も月子久気  
秋のら次

右大臣

ひまの若にむ秋の空をとも月をよる山をの月  
駒込と

後醍醐院御製

ひまの雲乃とあそむ秋の影をとも月をの月  
心三位知家

夕なれの月乃とあそむ秋の影をとも月をの月

新用自家百首一系京月

前大御之為家

わが初やちのるるわの宮のたもちけねとて十月月歌  
用路月とつるるを

大京大史頭補

河原の宮の清ゆらんをるるを十月の歌を

とめ

續拾遺和歌集卷第五

秋尋下

御守

信實朝臣

月影をさし成り橋姫のさるるやなほさるる月風  
大宰府補考經

さるるのさるる神と初やさしを月影さるるは河原  
人へ初をさるるてさるるしは十月の歌を  
さるるをさるるを

上天皇

わが宮の月影初て河原の歌をさるるを  
文永五年九月十三日白河五首并合ふ



河津澤月

赤大御之考氏

新やの月のおつとひのこあききりす地ろ枯乃海乃

形一守

竹後純清

ちろのりね系すれと龍田河月あも水乃枯乃海乃

文永五年八月十二日親由裏す合河月似氷

典侍執子朝臣

龍田川志の浪のあろかたまるるる者乃月之有尼

月秋中

前大信正慈雅

て海月ひりりとまゐりす風と書所守らる山川のあ

建保二年秋十月首あすそと出りける時

後久我左政大臣

るる心然の定めのか乃月やんこまれ龍まら

中書省あ命

野宮左大臣

きたひの志すれ水とそ乃月やじとく之海あす

形一守

平政村朝臣

みあろのりひのあにそと露のあすはり月あけさ

惟宗忠京

ああろのゆれ儀乃志乃凡れすらつらる枯乃月影

平清時

あひるの浦のそり流あつらゆとそやす枯乃月

文永七年八月十二日親由裏三首言に海月とあぬ

こころ

右邊門將実冬

きつりやわらふ月の新しき夜を浪とわらふ風を吹  
弘長三年の百首あたままろりし浦月

前大御之存氏

清見の酒や空のそらけとさる月あかきすの境風

光の巻も入道前権政家の八月十五夜あ合り

若菜月

後堀河院氏初つ西侍

清見の月乃そらに開とわらふそらたの秋のそら

月夜中し

登蓮法師

清見の月とてあかき此のそら風はたのけあかり

弘長元年百首あ合りそらあ合り月を

衣笠田上信

書あつる生園の毒乃枯れしそらあ里と月あ合り

文永五年八月十五夜あ合りに田家見月

後二位行家

稲葉の月乃そらあ合り此のそらあ合り月を

建長三年九月十三夜十首あ合り小田家月

前田上信

この月あ合りあ合りあ合りあ合りあ合りあ合り

歌ふか

安嘉門院四条

風乃書と吹とあ合りあ合りあ合りあ合りあ合り

前権政左大臣

月あ合りあ合りあ合りあ合りあ合りあ合り

前大御言為家

秋とてを居りしつふを社形、秋を月小を  
建長三年八月廿五奉為好む言合し月前風

後醍醐院御書

あつ風の風をかまふ月前風十更をれを月前風  
考らら月をたてよむり

皇太后宮女史後成

予の御書平の秋と好む言合しつふを月前風  
月乃言ま

式子内親王

あつ秋はつらふ言まをゆめと志す月前風  
建長元年百首言まを月前風

衣笠内大臣

秋のつらふ言まを月前風  
家ノ月前首言まを月前風

後醍醐院御書

あつ秋はつらふ言まを月前風  
建保百首言まを月前風

後醍醐院御書

月前風を月前風  
建長三年八月廿五奉為好む言合し月前風

右兵衛尉信家

あつ秋はつらふ言まを月前風  
建長三年八月廿五奉為好む言合し月前風

新ら成

は平定毎

是所のところの事だぬこと子母をきまのる月を

必新法師

持り書しめたる事いふの事勢にのり續りあり年月

家六百番あり

後京極格政事大官

小室の田のすゑの事略のりを久しきりじきり月

老の事より久しき格政事秋三十首あり中に

光俊の信

秋の田をいそがせりより吹凡山をいそがせり

美治日そあまのりける付秋田

赤内之信 基

又百首の田の秋の事いひるやなりきれたるや

山階念た上は家の十首あり田家秋を

赤大油之力氏

赤大油の事いそがせり

秋あり中に

持大油言長家

小山田の事いそがせり

持大油の事

順徳院法製

中野の事いそがせり

後京極格政事大官

かろくそこの孫人給ふこと都の月をいそがせり也

家六百首あり

入道二宗親王性助

おとあつたまきさしむしと月影を丸くしと秋の暮り

秋の暮り

右近中将理家

秋の暮りさしむしと月影を丸くしと秋の暮り

老翁若も入道并格政家のあかき風を格衣

洞院格政大夫

左で少後ありての秋の暮りさしむしと秋の暮り

濱格衣とさしむし

祝了成以人

浪のつらさしの深き風を丸くしと秋の暮り

秋の暮り中し

格信正実伊

海風や格衣しむしと秋の暮りさしむしと秋の暮り

津守國平

夜よりさしむしと秋の暮りさしむしと秋の暮り

野真格衣とさしむし

格実使真定

秋の暮りさしむしと秋の暮りさしむしと秋の暮り

秋の暮り

格信正実伊

秋の暮りさしむしと秋の暮りさしむしと秋の暮り

建長三年以田少く十首言子とさしむしと秋の暮り

格信正実伊

秋の暮りさしむしと秋の暮りさしむしと秋の暮り

秋の暮り

格信正実伊

神あはれなるまじりて枯く床も何となく秋風を

秋意中より

赤田之良 甚

乃其れわらう上葉舞うる言はぬやうに啼らん

光明寺入道前権政家秋の三首詠

後二位行家

わらわが秋のさうらゝもささきとて、柴切ゆゑに庭におも

詠らば

西行法師

焚く草をよみよみよの秋のささきとて、柴切ゆゑに庭におも

藪虫とてつらむ

大宰権帥為経

実乃の心遣ひはる長月のあさけのさうらゝもささきとて、柴切ゆゑに

田上良

葉の原なる秋のささきとて、柴切ゆゑに庭におも

白河乃七百首のささきとて、柴切ゆゑに

後醍醐院御製

ゆてを中をせむかたをささきとて、柴切ゆゑに庭におも

詠不念

光明寺入道前権政之良

秋のささきとて、柴切ゆゑに庭におも

建長六年無心殿小てららての首の梅をゆき

初筆といふ事

昌隆入道前権政之良

ささきとて、柴切ゆゑに庭におも

秋のささきとて、柴切ゆゑに

山階入道之良

吹去の心は風のかよふまゝに染められしつらさ

文永五年九月十三日奉白河元五首并合之卷

紅葉

後漢誠院之由

付毎く重なるを以て紅葉と名づくは此の如き也  
百首歌をてしりし時

持中御言云雄

紅葉にこそ甘藷のふれも去れぬるを感ぜ

以長元年百首歌たすまの昔の紅葉也

常盤井入道前太政大臣

秋の心は風のそよぐりしりしを感ぜぬる

衣笠内大臣

そよぐ風もや木守るのわが心は枯れぬる

洞院権政家百首歌の如し

藤原門院打将

音の事染めぬるはたより去る心は枯れぬる

冠不念

右京京總

付毎く生田乃杜のこゝろ染めぬるはたより

建長三年九月詩并合之山中秋真

右兵衛衛尉教

心は心はの本葉にこそるり下るりけり

紅葉とてしりし時

右上天皇

とみり榮とて下りてりてさるるをいふ事ありてはなほ心せ  
兼之元年由事方合て庭紅葉

前中油言定家

とらふて本ありなまをさるる心ありてはなほ心せ  
紅葉感とてさるる事あり

後醍醐院御製

枝の心その紅葉いふ事ありてはなほ心せ  
贈たふは長実家方合

左京大文顯補

秋の心その紅葉いふ事ありてはなほ心せ  
紅葉中記

後徳右寺大旨

心ありてはなほ心せ  
宿百首あり

後京極権政大旨

秋の心その紅葉いふ事ありてはなほ心せ  
子言百首あり

子言百首あり

昔より吹雪の心ありてはなほ心せ  
中願師光御旨

中願師光御旨

平教世の心ありてはなほ心せ  
前大信心道玄

前大信心道玄

心ありてはなほ心せ  
巻の百首ありてはなほ心せ

巻の百首ありてはなほ心せ



順徳院法製

予々々山本茶吹りく世凡むらりくめりく世りく世

建保三年由裏百番あり合し

昔世井合をよき世に

心算のり世の事あり世の事あり世の事あり世の事あり

心算浮世といふるをよき世に

後三條由上

あつりや言の世にあり世の事あり世の事あり世の事あり

百首あり合し

今と二条親王世助

心算のり世の事あり世の事あり世の事あり世の事あり

善世の心を

あつりや言の世に

心算のり世の事あり世の事あり世の事あり世の事あり

先の善なる世をあり世の事あり世の事あり世の事あり

前用白左大臣系

心算のり世の事あり世の事あり世の事あり世の事あり

心算のり

心算のり

心算のり世の事あり世の事あり世の事あり世の事あり

西行法師すしあり世の事あり世の事あり世の事あり

左近中将云

心算のり世の事あり世の事あり世の事あり世の事あり

心算百首あり

式子由親王

冬...  
千五百番奇...  
大内門田大后

續拾遺和歌集卷第六

冬奇

初冬の公と

後鳥羽院御製

冬...  
院并由侍

院并由侍

冬...  
道助法親王家の平首方に朔時雨

道助法親王家の平首方に朔時雨

正三位左大臣

冬...  
千五百番奇...  
大内門田大后

千五百番奇...  
大内門田大后

大内門田大后

時をくちあらう人非青月とて其の田乃森北平に

小竹堤

そこのそとにたれおあつたてふとんそとあなつ時を

百首あつてまうりつ

春宮太又實意

吹雪の風まきそふふに去るれそはれとまはら

群ら吹

竹堤雅有

あつたの卯吹雪本戸とまはれつてふまはら

あつたの卯吹雪本戸とまはれつてふまはら

め新法印

あつたの卯吹雪本戸とまはれつてふまはら

冬衣中に

并開白丸太呂 一系

晴々のたそふとあつたの卯吹雪本戸とまはれつてふまはら

順法院清和

山嵐のたそふとあつたの卯吹雪本戸とまはれつてふまはら

菅原立匡新呂

深のそと本葉とあつたの卯吹雪本戸とまはれつてふまはら

宗蓮法印

卯吹雪のたそふとあつたの卯吹雪本戸とまはれつてふまはら

平政村新呂

こまらふとあつたの卯吹雪本戸とまはれつてふまはら

左近中将家教

わく吹本のといふ若くせんをその時毎に居るにじつと其  
百首ありしれきつ井くい

右上天皇

祚多月よりそあやまの心付多たら本祭ありん

藤原為世朝臣

ひそのをきとるの心付本祭乃くはあつ時毎に

中務少宗尊親王

ひ雲に流るる系かじと志くは心付たりの本祭あり

式部院院連

本和乃凡くはあつ紅紫やせよとを子あ志くれありん

従三位忠直

新田心付くはあつりのもそや本祭の心を乃時皇なり

弘長元年百首歌をそまらつ時あつしん

前大納言為氏

伊勢の村乃あつてをえんたむとらとあ本はのむ

く心付とさつりてあはしうまらつ井てにあ葉

浮水といふる心を

右上天皇

本和の心を本和の心をめてし心付を井らあ本はのむ

若は乃あつとくまらつりあ

深具親朝臣

とみらあつありあせらと本和の心をあ本はのむ

新らる

大御門院以製

るはのたむとやふとそおん本祭よりと字はのあふ本

後系格格政前大政大臣

高のらふを返らぬとも本丸や君りてくに朽めん

平政長

み世のあとも君とたててむら松子と返のを草子

お右兵衛衛者教女

あふぬれ君のあはれまてと露のあはれとむら松

百首あやむ

前大御言資太子

今らと若菜とむら松家とむら松と君とむら松

堆明親王家の千あ首りあふ

前中御言定之家

弥言月言あむら松はむら松のあはれむら松

新らる

順徳院法製

むら松のあはれと君とむら松とむら松

前開白左大臣一系

ゆねふ祐のく言の冬あむら松むら松

大御門院法製

ふららむとむら松むら松のあはれむら松

くえくくらる

あふむら松むら松むら松のあはれ

小竹造

君の御方より冬に心算を抄められたりけり  
後京極権政前を政大臣

秋の風をいれ抄と成事と月日新と記りたりけり  
建保三年の裏百番奇し合し

常盤井入道前を政大臣  
みせし言抄の御事と月日印の抄のそり

冬月と  
行大御言長雅  
こゆる抄とよまの抄のそり月日のひりあひ

荻原基徳  
葉の葉をいれ言抄の御事と月日印の抄のそり

豊治百首歌をよまの抄の御事と月日印の抄のそり  
冷泉を政大臣

山吹の葉をいれ言抄の御事と月日印の抄のそり  
百首言抄の御事と月日印の抄のそり

後深徳院清製  
平の御事と月日印の抄の御事と月日印の抄のそり

歌の御事と月日印の抄の御事と月日印の抄のそり  
古侍門院の御事

つる鳥といふ御事と月日印の抄の御事と月日印の抄のそり  
京極院内侍

冬月と月日印の抄の御事と月日印の抄のそり  
後京極権政前を政大臣

冬月と月日印の抄の御事と月日印の抄のそり  
後京極権政前を政大臣

て家月の影もまをささねあつらふかたのつらさの海つらさ也

行律師云哉

春成の心もつらさの心もつらさの心もつらさの心もつらさ

後惠法師

塩風よまじれ浦宿をゆれそそのこわらぬぬらるる響

兼蓮法師

さゆの響のうきぬら野はく枕ゆやまの心もつらさ

宣秋門院丹後

かききの響も袖もむらみはらけはなれぬ心もつらさ

西園寺入道前右政大臣

山ゆりもみらけらるるうきも木風もつらさの心もつらさ

安房番方合

前右細言忠良

ゆゆけの音も心もあまたせむらこの心もつらさ

平宣時

平宣時

さ浪やまの響のうきもあつらふ心もつらさ

太田頼重

岩もりの響のうきもあつらふ心もつらさ

洞院権政家の百首平に水と

心三位家

せぬあまの響のうきもあつらふ心もつらさ

建長元年三首歌川次

冷泉右政大臣

風をよみたる所の河原の草をよみたる所の歌集  
教とよみたる

中務卿宗尊親王家の百首言ふ  
竹中油言具房

万葉方之傳のいふ此の玉乃玉の歌  
建保五年四月度申す冬冬をいふる言

何れかまよふとあはれは日乃節の歌をいふ  
冬冬此中に 從三位有繼

心なる歌のうたをたしむ風をいふたれは  
弘長元年百首歌之をいふる時

あはれはくはる風をよみたる所の歌  
前大御言為氏

名をよみたるまはる時  
あはれはくはる

志賀の海をよみたる所の歌をいふる風  
建保五年内裏言ふ今冬河風

はるの言ふとよみたる所の歌をいふる風  
百首言ふとよみたる

明徳院以勲

百首言ふとよみたる

明徳院以勲



山川の勢を記しありていつのあけをたづねる者

歌ふ乞

お天保正徳法

と物いふかきおて冬をえつてお世帯のさすおる白書

兼元元年内裏方合之村間書

正三位の家

物いふをゆきまき平和のさりし物い書きたまはる

雷りおた右馬門番忠基とていつのまじり

九条大右衛門

おまはりお書いそくしお世帯のさすおる白書

洞院橋政家百首のさすおる白書

おまはりお書いそくしお世帯のさすおる白書

おまはりお書いそくしお世帯のさすおる白書

冬を中し

光後朝臣

おまはりお書いそくしお世帯のさすおる白書

康徳門院お将

おまはりお書いそくしお世帯のさすおる白書

藤原教雅朝臣

おまはりお書いそくしお世帯のさすおる白書

西行法師すゝめお世帯のさすおる白書

左近中将云御

おまはりお書いそくしお世帯のさすおる白書

おまはりお書いそくしお世帯のさすおる白書

前大御言為家

春の霞のさう糸と云い雲と云い霞と云い雪と云い

道洪法師

守之は秋と云い春のあそび首飾と

寂蓮法師

山嵐のさう風と云い雨と云い雪と云い

文永十年七月内裏七首言たさすりし

右京隆博法師

初と云い終と云い始と云い終と云い

初と云い終と云い始と云い終と云い

ゆかり

賀茂氏久

秋の初と云い終と云い始と云い終と云い

弘長元年首言たさすりし

二位行家

言圓の初と云い終と云い始と云い終と云い

多治百首言たさすりし

二位頼氏

志保の初と云い終と云い始と云い終と云い

建保五年内裏七首言たさすりし

信実法師

甲子の初と云い終と云い始と云い終と云い

冬多中に

平政村朝臣

任堀河や浦ののこりも言なりともお塩屋をいふ  
雪中遠境といふ事な

法性寺入道兼用白土政言

かき下り白雲に塩屋の浦の多うと路や志おん  
白河殿七百言演多言

後醍醐院御製

八百の後のまゝらと路とわかるとんつりも言  
新らり

心教町院右京大夫

かきいふれさの事まてはつとあつとびあはれ  
そいとい新らつり言の心はれはゆきおん

ゆけり

国防内侍

かきいふれさの事まてはつとあつとびあはれ  
交治百首歌をくしひり守る付積雪

院中内侍

そはといぬらるもわかたみまのら乃重井白雲  
宿百首言

前中御言定家

そはといぬらるもわかたみまのら乃重井白雲  
中持ゆきり守る重井白雲  
そはといぬらるもわかたみまのら乃重井白雲  
そはといぬらるもわかたみまのら乃重井白雲

前大御隆房

わがことしはけの久うなりまね書と月夜中ふみ一邦

大御言通方八播宮少くま合の御書に冬は

月  
從三位西氏

山方瑞雲を思ふまじくはれく雪にまゆみぬる月

後高祖信下冬月廿首言たてしはりの書あり

如願法師

とほひらきし書めまはする神乃抄上月とわきま

弘長元年十二月由裏三首言ふ河氷

後花山院入道吉成公望書

年月をたもとまあわすうのゆせの浪乃がふはる

人々上平首款ませたり言ふ時

法平光寛

冬乃冬日新年のことあまのいよとあはれくあはれ

百首言ふことしはりの時

光助法師

山方抄月旦はれはあやとあはれくはれき年乃書に

新らんと  
新記成仲

書ゆはれはれは乃あはれはあはれに年ひまらるる

年乃書にふえのまら

皇太后文太女後成

し年をたはれはあはれはあはれはあはれはあはれ

基俊

花のあはれみちるる人なほしよひとらふとれ年と

花のあ

續拾遺和歌集卷第七

雜春

弘長元年百首言たてまつる書討抄卷のなを

衣笠内大臣

わが歌のなほたれひの書きこてたれあつて代とまほしきいなり

花のあはれ

後頼朝

花のあはれい少とさげきりつとけり春をさるん

まきあり中に

雅成親王

池上たつみささけのまきり書あつてはあをさむあつた

前大納言顯朝

雪は花をいかりぬあつてまきいかりとらふのこの鳥

山階入道大長家十首ありし百首とて今も

式見門院左京大夫

とてあまのふはるのつまをれねのむの勢をま

山階入道大長家十首ありし百首とて今も

保良氏新臣

首のむらひの忘れねをひのれてまをま

百首ありし百首とて今も

百首ありし百首とて今も

皇太后宮大史俊成

をるりありし百首とて今も

をるりありし百首とて今も

交治百首ありし百首とて今も

後醍醐院法皇

平之文をるりありし百首とて今も

白河及七百首ありし百首とて今も

前大納言考家

山階入道大長家十首ありし百首とて今も

建保三年由裏より合上露

從二位家隆

建保三年由裏より合上露

平教清女

建保三年由裏より合上露

喜多中に

八條院高倉

又てとぞぞのいひあるのちの月よりの梅え  
在はるし手そ印さしつりわゆるとやうのたはる  
可の梅と見くふ人ゆりやふ

兵部少輔

折てふんせえやの梅むりりる者とりをれそす

康元二年二月はつひの梅むりりる者とりをれそす  
かひらわらうゆりまら付ふ人ゆりやふ

前土御成爲家

かきまの梅むりりる者とりをれそす

後房と

天台座主云直家

折てふんせえやの梅むりりる者とりをれそす

藤原隆祐朝臣

折てふんせえやの梅むりりる者とりをれそす

前用白系家百首歌ふ人ゆりまら付ふ

右近中将御家

折てふんせえやの梅むりりる者とりをれそす

建保百首歌ふ人ゆりまら付ふ

前中御言定家

折てふんせえやの梅むりりる者とりをれそす

初花のなと

月花門院

折てふんせえやの梅むりりる者とりをれそす

朝方中に

七侍門下小宰相

たりきはきよのありしはむらりの朝あねと

右近中将卿良

今内い言とをいひ孫をきく宿の朝乃あり

前出御言為家任る乃れあき命のつるに

野原と

荻原仲敏

ゆきよは内進はれ携り朝やいふ宿をかりし

輝一守

よえ人志と

吹とあわしと朝のあひあき暮るり山さくら

河を朝といふるを

源時清

ちあまの浪も携りいふの朝のあひく山河の水

春宮帯カみくゆげの事とほひ出くさる

荻原基政

いふのま乃みふの携りあはれもせの臨り里あ

衣を朝といふ事をいふゆりきり

権左衛門尉俊雅

いふのあきやまのあきまの心とくさひあひいひん

お形を

前大僧正道玄

名いふせの若きとあはれも暮をほふ志の朝の

東山を朝といふるをいふゆりきり

長部公隆親



おのれをまよふかこは世に後のかたまりなり

前田の中心

前田の臣基

おのれをまよふかこは世に後のかたまりなり

夜笠由之臣

おのれをまよふかこは世に後のかたまりなり

信実朝臣

おのれをまよふかこは世に後のかたまりなり

法下云朝

おのれをまよふかこは世に後のかたまりなり

京月法師

おのれをまよふかこは世に後のかたまりなり

世にのれをのらむとみくもあり

志朝法師

おのれをまよふかこは世に後のかたまりなり

後醍醐天皇の御早首あり

おのれをまよふかこは世に後のかたまりなり

おのれをまよふかこは世に後のかたまりなり

おのれをまよふかこは世に後のかたまりなり

土御門院法師

おのれをまよふかこは世に後のかたまりなり

おのれをまよふかこは世に後のかたまりなり

おのれをまよふかこは世に後のかたまりなり

前中御所定家

おのれをまよふかこは世に後のかたまりなり

花とみくも人ゆりたり

蓮生法師

あさのぼけのうたの余もそ花をくくくしおのこも  
雲林院とて花のちりやうともゆかり

中原行範

花のよきたるめそく行もくちひもゆちる橋  
落花とよめり 平長時

藤原宗恩

うそさるるひもそ花のよちりも感と山をさう  
ありて世の後うらも橋をゆかんとてまき乃山風  
静仁法師

花のよきたるめそく行もくちひもゆちる橋  
花のよきたるるひもそ花のよちりも感と山をさう  
うそさるるひもそ花のよちりも感と山をさう

源光行

花のよきたるめそく行もくちひもゆちる橋  
花のよきたるるひもそ花のよちりも感と山をさう

法眼宗因

花のよきたるめそく行もくちひもゆちる橋  
花のよきたるるひもそ花のよちりも感と山をさう

久見人吉

花のよきたるめそく行もくちひもゆちる橋  
花のよきたるるひもそ花のよちりも感と山をさう  
水色は花のよちりも感と山をさう

藤原春徳

吾郷のよしの西に武蔵のよきを割ぬと云ふ花の歌  
は下巻末

花のよけはる風吹ぬあはれをさる花のうら  
平長季

ちのよれ歌の境とあはれをさる花のうら  
春歌中に  
前用白左大臣系

勝川のよけはる風吹ぬあはれをさる花のうら  
藤原家泰

わのよれ歌の境とあはれをさる花のうら  
秋了忠成

櫻のよけはる風吹ぬあはれをさる花のうら  
平義政

あはれをさる花のうら  
中務少宗号歌

あはれをさる花のうら  
前内大臣基

あはれをさる花のうら  
百首あはれをさる花のうら

あはれをさる花のうら  
前大信正隆辨

あはれをさる花のうら  
藤花年をさる花のうら

あはれをさる花のうら

隆覚法親王

復書のねり志の枝の花たることごとくを説くは唯  
五部と百首ありてなまの書は是れ  
わたすのうし志路のゆとを記すは

里之右文之文後成

考ふ書のねりからぬとある書とて述ぶる有浪  
をねりまをくことなるの書討ゆけり

前中油云定家

立ふの書は是れをねりはるじりたる事なるねり  
ねりくねりたるねり

前中油言為家

その案のねりねり有浪とたたらるる書は是れ  
三代の筆此ねりをくみねり

前中油云為氏

春のねり十たのねりけしひりかたる書は是れ  
法中元寛くまねり本首書中に

八條院高倉

かゝるて卒の書とて三年のねりひりかたる  
家と百首ありて久ねり時考

後法親王入道前用皇孫

実のねりねりて成りし書は是れねりひりか  
洞院権政家百首ありて書

後二位成実

かみかたきくをたむらへははるるのまきくたふしき

善まきかた

光俊朝臣

そくちのまきくたむらへははるるのまきくたふしき

かたむらへははるるのまきくたふしき

約き

院并由約

神まつり卯月のたむらへははるるのまきくたふしき

尾まつり卯月のたむらへははるるのまきくたふしき

尾まつり

和泉式部

善柳のまきくたむらへははるるのまきくたふしき

卯

大貳三位

青柳のまきくたむらへははるるのまきくたふしき

卯

大貳三位

卯まつり卯月のたむらへははるるのまきくたふしき

体懐百首の中

曾志后ら大文信成

卯まつり卯月のたむらへははるるのまきくたふしき

世のまきくたむらへははるるのまきくたふしき

卯まつり

平泰時朝臣

卯まつり卯月のたむらへははるるのまきくたふしき

卯

後三位行徳女

卯まつり卯月のたむらへははるるのまきくたふしき

開白乃毒たふしけりてはら時鳥と承て

亦開白左之臣 鷹目

約るれはらし心乃れおほしきまはる井井をいさくえ  
部一守 法下云豹

そらる栗のりかあまの耐をういありありかかみ  
百首歌とまうりーそれ

靜仁法親王

あふ人もあにいそせ世乃耐をわういありそあはる  
寢覚え耐をいさくえ

前之御言為成

あきかきしそ和とくくさあらの考の和之の和丹まい

曉部云

徳寺入道前之政之臣

あまのいれいあしあまのそふりり月一守  
夏之あ申に 前右兵衛番為教女

鎮倉右之臣

あふいそあをそしあまのゆりの雨りあふふらむ  
七御門院法親

夜之御福といふこと

天台座主云豪

構らたる袖の着しわのきむの和之をいさくえ

河舟毎

荻原京家

わさねぬらむとてさきかへりてはらほさるる舟毎  
中将とのそえりてはらへりてはらへりてはらへり  
とていづつけりて

竹堤雅有

いふとていづつかへりてはらへりてはらへり  
討ちていづつ

源秋行

わさねぬらむとてさきかへりてはらほさるる舟毎  
法眼慶融

法眼慶融

新とみよかへりてはらへりてはらへり  
家十首とていづつ

山階入道尤大旨

茶ゆきとてはらへりてはらへり  
新とみよ

法橋素拙

芸船川山だけの中屋とてはらへり  
わさねぬらむとてさきかへりてはらほさるる舟毎  
とていづつ

大徳正道

とていづつ  
百首とていづつ

入道由大旨

みよとていづつ  
六月後と

前大徳言為家

涉桜川の影をへる屋を夏にけく空に霞のよそ

十

續拾遺和歌集卷第八

雜秋歌

初秋の心をよる人のゆるり

前左兵衛傳教定

あき東の志乃秋之の花より雲とよきとあて秋の事なり

先後朝臣

あきありあつさ海をけいそあきの名に物乃きあは

藤原季宗朝臣

袖のうしろとわら白落乃草葉にひき秋をこひり

初秋風とよめとよ

信正朝臣



今より涼く存るれば其のまはる葉のさる風の吹

糸をいざりしゆりつるまじき片のめくら乃其の風

文永十年七月七日由裏し七首あつとまうり付

前大御云考家

わ此のやそらふふむらけふたたらるるやあひる

醍醐入道おと政大長女

かきそらるる後あつとまうり物もふ袖をまのむつと

静仁は親王

秋の葉の昔はふら風は老い伊りゆりゆり

以長元年百首あつとまうり考り考り秋葉を

前由大長基

秋の葉の昔はふら風は老い伊りゆりゆり

おと政大長女

よのふらるるまは秋のまの吹る風を秋葉を考り

秋風を考り考り考り

高階宗成

秋の葉の昔はふら風は老い伊りゆりゆり

以長元年百首あつとまうり考り考り秋葉を

常盤井入道おと政大長

かり秋する葉の花の枝はしそらりちる秋の白雲

秋を考り

前大御云基良

あまのついでに... 皇極天皇の御代に於て... 皇極天皇の御代に於て... 皇極天皇の御代に於て...

山階入道太皇太后

中務卿宗尊親王家の御代に於て... 皇極天皇の御代に於て... 皇極天皇の御代に於て...

左近中将具氏

皇極天皇の御代に於て... 皇極天皇の御代に於て... 皇極天皇の御代に於て...

後醍醐院法皇

皇極天皇の御代に於て... 皇極天皇の御代に於て... 皇極天皇の御代に於て...

前右大臣

皇極天皇の御代に於て... 皇極天皇の御代に於て... 皇極天皇の御代に於て...

三位忠義

皇極天皇の御代に於て... 皇極天皇の御代に於て... 皇極天皇の御代に於て...

平親清女妹

皇極天皇の御代に於て... 皇極天皇の御代に於て... 皇極天皇の御代に於て...

藤原宗理

皇極天皇の御代に於て... 皇極天皇の御代に於て... 皇極天皇の御代に於て...

左大臣

皇極天皇の御代に於て... 皇極天皇の御代に於て... 皇極天皇の御代に於て...

源親行

皇極天皇の御代に於て... 皇極天皇の御代に於て... 皇極天皇の御代に於て...

安部門院宗隆

一、是より雲井の存続つゝいふは後よりかけてしるべし

前由大臣 基

河原よりわたり宿の敷をてかひなくしつゝ持乃おひさ

建長三年九月十三夜十首并合上霧間馬

七、清心院小宰相

一、是より雲井の存続つゝいふは後よりかけてしるべし

中、原隆博の旨

一、是より雲井の存続つゝいふは後よりかけてしるべし

海老原行実

一、是より雲井の存続つゝいふは後よりかけてしるべし

二、井寺にとも月より久しき事なり

淨助法親王

一、是より雲井の存続つゝいふは後よりかけてしるべし

田家月より久しき事なり

藤原時範

一、是より雲井の存続つゝいふは後よりかけてしるべし

月前連懐とて御事を

荻原長宗

一、是より雲井の存続つゝいふは後よりかけてしるべし

法下祿助

一、是より雲井の存続つゝいふは後よりかけてしるべし

澄光法親王

あるを此忘るするに年々あつてさへいふ月あけは宮院  
弘長元年古首言をすもすもつりきり付月を

前大御言考家

秋言中の記述はつふまき必そとみたりある月あけ

秋言中

前用白た大臣系

月だもむ乃海のつととむじつこの秋乃在とて連

建保二年秋十首秋とてしつり言る時

ぬ新法ゆ

物存秋つらつら梅あむひあはれ月とかな物存

秋つらつら

前大御言考家

今ひのえかつりの考あむいころあむは秋乃夜梅

西行法ゆ

そふ事じかつりのつりきりあはれ秋とすあつ月あ

高弁上人

秋乃事とつねなるそつねひきりあはれいふ言ふあはれ

法平云物

あつらさかつらあはれ月あけとていひつりあはれあはれ

建長三年九月十三夜十首言あ合とるあ月

兵部少丞

年あつて介も昔ふそりふり里あはれあはれあはれ

月乃言をそ

鷹司院帥

月あつてふそりあはれあはれあはれあはれあはれ

皇太后宮女

あつたにやむかひの月をいへるを神の御ふ  
秋の月とて井の形えあふ世の才かたる御歌

二條院積政

皇太后宮女 雲の馬の月を我とてあはれ  
新入りておらふ人かひけり

藤原長徳

雲の月の光を杖とてあはれけの衣たあはれ  
常盤井入道常武政の宮女を月をうかひけり  
中に  
前大御女家  
はるをさかるとてあはれ 我ながら月をいへる御歌

洞院栲政家乃百首并に月

前中御言定家

しる御歌あはれ御歌あはれ御歌あはれ  
杉門到暁月徘徊といぬをいへる

和氣雅成御歌

あつたにやむかひの月をいへるを神の御ふ  
あつたにやむかひの月をいへるを神の御ふ

前白左大臣 兼

あつたにやむかひの月をいへるを神の御ふ  
あつたにやむかひの月をいへるを神の御ふ

新ら歌

光俊御歌

あつたにやむかひの月をいへるを神の御ふ  
あつたにやむかひの月をいへるを神の御ふ

法眼源兼

そとにさるる世をみれば世をてむる海は月影を  
そとにさるる世をみれば世をてむる海は月影を

道洪法師

月影をみれば世をみれば世をみれば世をみれば  
中びのこころをみれば世をみれば世をみれば

定法法師

中びのこころをみれば世をみれば世をみれば世を  
月影をみれば世をみれば世をみれば世をみれば

信實朝臣

月影をみれば世をみれば世をみれば世をみれば  
信實朝臣

月影をみれば世をみれば世をみれば世をみれば

前大信正道玄

月影をみれば世をみれば世をみれば世をみれば  
若葉百首ありきりつせに

順徳院法師

若葉百首ありきりつせに  
月影をみれば世をみれば世をみれば世をみれば

良暹法師

月影をみれば世をみれば世をみれば世をみれば  
建保三年秋十首ありきりつせに

源家長朝臣

建保三年秋十首ありきりつせに  
月影をみれば世をみれば世をみれば世をみれば

百首歌集中 前田大居士

身は千の世の福を乞ふの力にぞはむけつゝまをたれは

神にあらん 久人あはれ

千のふしの福を乞ふ身はまをたれはむけつゝまをたれは

平忠時

何れも床は系帯のまをたれはむけつゝまをたれは

法平公約

養子くまの福を乞ふ身はまをたれはむけつゝまをたれは

光助法親王

まをたれはむけつゝまをたれはむけつゝまをたれは

百首歌集のまをたれはむけつゝまをたれは

前大徳之良教

世の福を乞ふ身はまをたれはむけつゝまをたれは

少将の福を乞ふ身はまをたれはむけつゝまをたれは

藤原隆博朝臣

いそせの福を乞ふ身はまをたれはむけつゝまをたれは

長月の例幣に神祇官よりけりまをたれはむけつゝまをたれは

なりそあはれけりまをたれはむけつゝまをたれは

院弁田約

いそせの福を乞ふ身はまをたれはむけつゝまをたれは

いそせの福を乞ふ身はまをたれはむけつゝまをたれは

法眼慶融

よびきたらう袖をりやひの葉のけし秋の時を

秋の葉のけし

式見門院清運

はひの葉のけしをけしはひの葉のけし余をきくは秋のけし

彦治百首歌子とまうりまうり物冬時をうらま

後三位有徳

冬乃の葉のけしをけしはひの葉のけしをけし

新ら次

右原重右衛門

おてたあをけしはひの葉のけしをけし

寒連法師

よびのけしはひの葉のけしをけし

前中袖之資宣

よりつる木葉のけしをけしはひの葉のけしをけし

大御門院清運

よびのけしはひの葉のけしをけし

百首歌子とまうり

前中袖之資平

よびのけしはひの葉のけしをけし

冬之葉のけし

群仁法師

よびのけしはひの葉のけしをけし

前大信正隆弁

よびのけしはひの葉のけしをけし

若木田延季



神宮の地をたてまつるの處に十のふかしの御

宣旨法師

うけつたは後之神とありて時をうけりてその

法下公約

世にありていふは子のちをて時をうけりて後

行々信教系勇

神宮の地をたてまつるの處に十のふかしの御

澄光法師

ありていふは子のちをて時をうけりて後

平義宗

ありていふは子のちをて時をうけりて後

入道二宗親王高飛山とことりゆりまら

うり

中務二宗親王

はよりたるは子のちをて時をうけりて後

あ

入道二宗親王性助

ありていふは子のちをて時をうけりて後

古寺持よりあま

心念法師

たのふかしの御とありて時をうけりて後

神宮の地をたてまつるの處に十のふかしの御

ありていふは子のちをて時をうけりて後

選子内親王

秀君とわさあつそあす月等々との擲者獄らに

冬より中に

蓮生法師

予ら終ゆら葉とじと山川のこりそ枯ら冬さじり

行律師仙光

こらり池のり葉水と乾あてこりりそあつ冬る新景

永治元年讓位のらりこらりあつり考ら新草書

乃日自去ら后言りゆらりゆりらら今つらゆら

自去ら后又去後成

ゆらゆら日けとみと思とらあ君ととらつる葉あゆら

雲と

決義氏新景

わらあつるあつらこりらにゆらととららるるゆらとみら

雷のありまらゆらとゆら

上西门院兵法

葉にあつとけいあつとあつらとたなまら君いそとをら

新ら

ゆらと

里のかららるるのなまらととあつらとあつらとあつら

典作親子新景

たかゆ道の雲と成かたよゆとせげのあ白雪

平時夜

まののこらあ甘ぢやつらとあつらとたなまらとあつらとあ

前宮白太大臣 鷹司

詠つらととと新らととら雷のまらとせゆらとけり新らゆら

野徑雷とふんをよるなり

左近中将師良

春日野のありのたをて雷なりたるをよる

雷なりとて 前大御言良教

和とよむ世ふそある雷の我なりやる道ありを

建長三年雷とて十首歌をよるなり

前大御言良教

立るなりみつとて道のありをよる

和雷とてよるなり

冬きそい雷のよるなりをよるなり

和雷とてよるなり

よるなりをよるなりをよるなり

年の著しありなり

後醍醐院民部卿

ひまるとてよるなりをよるなり

前大御言良教に百首言をよるなり

從二位家隆

和雷なりよるなりをよるなり

和雷

續拾遺和歌集卷第九

新旅亭

旅亭まゝのりてゆく人なほしづかき

二条右大臣兼右大臣

とてふもいふもなほしづかき旅亭まゝのりてゆく人なほしづかき

藤原顯徳朝臣

旅亭まゝのりてゆく人なほしづかき

光後朝臣

旅亭まゝのりてゆく人なほしづかき

津守理國

旅亭まゝのりてゆく人なほしづかき

めねは御

旅亭まゝのりてゆく人なほしづかき

藤原宗恩

旅亭まゝのりてゆく人なほしづかき

よえんら次

旅亭まゝのりてゆく人なほしづかき

とよまらるけのたあくともり

荻原頼京

ひまりのあはれはひらりかきあつと山本志方かたひらり

道助は親王家の平育方の中に孫春雨

必頼法師

ひまりのあはれはひらりかきあつと山本志方かたひらり

藤乃公と

前大御言資季

あつとひまりのあはれはひらりかきあつと山本志方かたひらり

鞍中秋とつと山本

あつとひまりのあはれはひらりかきあつと山本志方かたひらり

あつとひまりのあはれはひらりかきあつと山本志方かたひらり

あつとひまりのあはれはひらりかきあつと山本志方かたひらり

あつとひまりのあはれはひらりかきあつと山本志方かたひらり

津守國助

白河の宮までゆつとあつとひまりのあはれはひらりかきあつと山本志方かたひらり

親不知

親不知法師

あつとひまりのあはれはひらりかきあつと山本志方かたひらり

将中御言具房

あつとひまりのあはれはひらりかきあつと山本志方かたひらり

法下最信

あつとひまりのあはれはひらりかきあつと山本志方かたひらり

前大僧心道玄

約々の神系の本乃系統を承りてはじむる事なり

大に頼重

卓まらぬ神の御事なりとてお告げしむ神の御風

貞治元年十月より合し孫首風

皇太后后言天皇後成女

あけとてあつたを以て孫統なりとてお告げしむ神の御風

あの中いふくもあつたなり

中務の宗元親王

あつたを以て神の御事なりとてお告げしむ神の御風

あつたなり

前大御言為家

あつたを以て神の御事なりとてお告げしむ神の御風

藤原泰徳

あつたを以て神の御事なりとてお告げしむ神の御風

平時村

あつたを以て神の御事なりとてお告げしむ神の御風

孫首風といふことなり

前大御言實家

あつたを以て神の御事なりとてお告げしむ神の御風

孫首風といふことなり

前大御言行高

あつたを以て神の御事なりとてお告げしむ神の御風

家の中首言といふことなり

入道二小親王道助

弟花白と親の夢よりなり老神よりある時乃月朝

羅赫れんを 從三位為繼

ゆねと夜あるをそは揚人よあまひくはつちの月

深右揚とささるといふ所のまろ

中務の宗尊親王

三歳と藤の夢乃のこに相うみ七月とわぬ

新不知 志の孝も金吾藤原左大臣

のねと山らのかゆ月けいぬるとつたつたは志揚人

祝詞成茂

物務のたらし目より揚志やけいさひの初とそり

秋の著つて海けいし出の著る道より松之西を成通  
のまといけりけり

西行法師

風うまの木葉とまゐりてはらうのゆゑ公平の月

貞治元年十首言合小藤宿風

前右兵衛督為教

玉の枕を色しとえりゆらるるをうたはれぬあまの

よのまらるけりさあまの九月つこりふとるけり

民部卿成範

弟花白と心より此は花白とえりてはるるをうたはれぬあまの

新不知 正親院右京大夫

御書に記し置るの十月に據るる神に風を

行急法神

時多しふしけを多しおきていそく宿をた

十月つとら此目よのまるときい所ぬれけけ

道信神信

志を然するあふしをそ神育神をふ家法をり

羈中々としてるふを

行律師定志

そよの宿より衣袖ゆとて夕雲むしをたあ東

建保五年内裏より命り冬々據

心三位知家

冬より思ひけりぬるを書いそ所里をまじりて東

行踏初雷といふ事

清浦朝臣

そよ書い我は初とけしを先わさたむいそまのふ

孫方中に

後京極権政前大臣書

ふらふきそりけりて終るあす志あき嵐のり書

家守令羈中一松風

志前書も又道前権政大臣書

あふ此原いと又壞りて衣をぬきあふりて書風

守覺法親王殿中首寄に據り

野宮左大臣



又塩の板に浪を花とく風もまら其教を授け  
鹽泊の心を 從二位家隆

おきり浪よふり夜のうら花をばさうの塩をばり  
鹽泊百首被たぐまりの付ある心

さうか花のみをばら花ゆきまら花のうら  
新ら守 祝部成賢

えんくうと新の床の浪花ゆきまら花のうら  
洞院栲家百首あり旅 信実朝臣

道と花をばらりと思ふれ花ゆきまら花のうら

還中 途と心あり心を

從三位光成

おん花と心あり下り花のうらけと海を定るけり  
新ら守 平長時

何れ花のうらと新著と一花をばり花のうら  
かひまのうら海をけり時あり心あり

行律師玄覺

ゆきまら心あり花をばり花のうら  
おん花をばり花のうら花のうら  
心あり花のうら花のうら

有原親朝

さうりあまの御まをばいしは君のまを我まはば  
素遣法師のまよりゆきまにけり

徳念右大臣

かき浪をきつてしむるの公ひらとらたあま

素遣法師

後より半路のまをまを十の浦まをまを

むらうまを降の志のまを対のうまをけり

定海まをまをまを

定仁法師

かき浪のまをたまをまをまをまを

大常まをまをまを

法下良実

まをまをのまをまをまをまを

新ら

平行時

かき浪のまをまをまをまを

白河五七首まを

持大納言理仁

都そまをのまをまをまを

旅言中

大徳卿行宗

都そまをのまをまをまを

衣笠由上

旅言のまをまを

猿蓑とつるんを 普光園入道前園自在言

そららゆき敷きまのふき枕じとふらり猿蓑なすは  
すかぬめくくふんゆりきり

前大信正隆弁

七年の年あつまにすう川老乃波ふかけそりき  
伊豫とよらるとけりあり

小弁

あかてかきただらふすふいふふふふふふふふ  
あかてかきただらふすふいふふふふふふふふ  
あかてかきただらふすふいふふふふふふふふ  
あかてかきただらふすふいふふふふふふふふ

安嘉門院甲斐

まてらげかひをたけし猿蓑たらやゆきとふふふふ

砂石を 尤近大將新光

そのつらまをふふそふふふふふふふふふふふ  
家百首歌ふんゆけり猿蓑のふを

洞院橋政左大臣

都へはるるふかきそとつゆりりりりりりりりりり

まひら

續拾遺和歌集卷第十

賀正

建治二年八月飛山殿あくるりめて初色浮池と  
しるる歌を稱せし事ゆつ井てふ

大上天皇

よる代と飛乃ち初の初とてゆてする庭と池は  
梅政前太政大臣

池は初の中をせとよみとるふとてふいあつと梅も  
実治二年春御あつく池上初とるる心を  
冷泉太政大臣

ゆきまがら初初代とかけらるる庭の池は

前大納言為家

池は初の中をせとよみとるふとてふいあつと梅も  
同年正月初初春とて事と稱せし事ゆつ  
法大寺入道前太政大臣

初初とて初初とて初初とて初初とて初初とて  
正元二年三月西園寺の一切雑修養と初華ゆつるふ  
春宮中文初ゆつ初初とて初初とて初初と  
ゆきまがら初初とて初初とて初初と

前大納言顯朝

たが初初とて初華ゆつ初初とて初初とて初初と  
弘長三年二月飛山殿と初華ゆつ初初と

不登河海せしきやうに序たるまゝなり

山階入道左大臣

あゝ〜の御業にちきろ山階なるをいふ〜の御業

冷泉太政大臣

飛鳥の山にひたる屋敷橋より代少きたが〜をみる

持大御言理任

若ふそ〜代少〜かぢの山にひたる〜

建長六年三首あ合し橋を

万里小路右大臣

ま〜の山に橋を〜

承安二年春おあ〜池上親と〜

苗家入道前内白太政大臣

〜の池のあ〜

變治百首あ〜

常盤井入道前太政大臣

〜のあ〜

文永八年七月院忠の〜

女房の〜

ま〜の〜

兵部少丞

〜の〜

弘長三年九月十三夜由裏十首あ〜

前之御言為氏

考の忠を於て書かば月并に建の元上かゝるぬる月以て分け  
家二十首言ふる久のりくふ小秋祝

山階入道左大臣

考此上のかげとて之を月并に建の元上かゝるぬる月以て分け  
寛治八年鳥羽殿ありて既池上月とて言ふる

行中御言後忠

長業のりくふ久のりくふ久のりくふ久のりくふ久のりくふ  
貞治元年十首言ふる合に海を月

正三位經朝

日此御言に於て海の上を元上かゝるぬる月以て分け

同年考御言とて五首言ふる月前祝

堤二位行家

考此のりくふ久のりくふ久のりくふ久のりくふ久のりくふ  
月と秋とを言ふを御言とて言ふ

左大臣

考此のりくふ久のりくふ久のりくふ久のりくふ久のりくふ

文永六年八月末東由事言合に田家見月

前中御言資宣

氏言のりくふ久のりくふ久のりくふ久のりくふ久のりくふ  
堤一位倫子七十賀に言ふる

字名入道前田自是御言

吾くもあやむかたむかして萬の心ひすを以てふらふを

百首歌の中に 式子内歌

ひまふまをまよひきり 吾代に歌をたつとむる萬の心

萬の心秋之とてな事

大宰府師為卿

つらむもあはれむかたむかして萬の心ひすを以てふらふを

正治百首歌の中に

前大僧正慈法

吾くもあやむかたむかして萬の心ひすを以てふらふを

歌不知

法成寺入道前右大臣

わが心ひすのよきひのむかたむかして萬の心ひすを以てふらふを

崇徳歌とてなるるを

常陸井入道前右大臣

うかあやむかたむかして萬の心ひすを以てふらふを

文永三年三月續古今集竟

後花園院入道前右大臣

わが心ひすのよきひのむかたむかして萬の心ひすを以てふらふを

建仁三年十月和歌百首と稱す

時より久しかりしを

前中納言定家

吾くもあやむかたむかして萬の心ひすを以てふらふを

前中納言範光

かきりたることこれのたみれ中せり故に

大蔵卿有家

老れぬるひたをさるるありとさるるふりみ録の月け

建長五年七月三日奇に

冷泉太政大臣 寺内大臣  
左大臣

新嘗のまはるはともなるのゆきさるるの瑞の月

祝の心を

行大御之長家

乙卯のちりねそそる代りともかきあきりたりぬき

建暦二年とみぬるに二年とみぬるつぎ

の目前中御言定家のともみぬる

衆議雅経 寺内右将

看まらりて二つはすりり別あるよきことなり

今上のゆえ服の付大御言定なりたりと喜ぶるは

おもひつけゆりやま

吾邦の隆歎

年子けせあひのころの君代ふりてなる道ありは

建久元年大嘗會主基方以屏風備中國神祇有

神祇有

亦中御言資実

神祇の浪れあひのかけもともかきぬるたれとを

仁治三年大嘗會令悠紀方風俗示御目山

亦衆議為長



あまけき清代のころは釣日あつたを那乃史河をふ

赤穂元年大嘗會書徳元方三日の系破を以て

村 赤中油言家光

二の風かけは中核の村わさるる要書と書あると

文應元年大嘗會云徳元方清屏風子玉井

民部卿徳元

海とらむせよか移くじとふか玉井の水を移り

志

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*



